HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	張載關學思想探微 : 宋明理學における「虚」の思想の研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	山際, 明利
Citation	北海道大学. 博士(文学) 乙第7171号
Issue Date	2022-12-26
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/87747
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Akitoshi_Yamagiwa_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　山　際　明　利

	主査	教　授	弛　和　順
審査委員	副査	教　授	近　藤　浩　之
	副査	准教授	梅　村　尚　樹
	副査	名誉教授	佐　藤　錬太郎（北海道大学）

学位論文題名

張載關學思想探微　－ 宋明理學における「虚」の思想の研究 －

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、北宋の儒者、張載（1020～1077）とその思想に關する本邦初の専門的論考であり、張載の代表的著作『正蒙』を中心に、その著述全體への精緻な讀解と哲學的な考察を通して、張載の思想の特色、獨自性を解明するとともに、その歴史的意義の再定義を試みた研究である。同論文の評價できるところとして、以下の三點を擧げることができる。

第一に、張載の學は、氣の思想と呼び得るかに關して、氣の思想と呼ぶよりは、むしろ虚の思想と呼ぶのが適切であることを明快に論證している。つまり、張載が存在ということ、生滅ということを論ずるときは、一氣の聚散を述べるが、同時に虚への回歸ということを強く意識し、また心性ということを論ずるときは、氣質の性という概念を提示したが、同時に人の本來性を天地の性と表現したのであり、天地とはその性質において太虚の顯現であるから、人の本來性は、結局、虚に求められることに依據して、張載の思惟の基調は、太虚および有形の物、また天地および氣質の間の循環論に他ならず、天人合一を説くことは、結局、虚との一體化を意味することを解明した點である。

第二に、朱熹の批判した張載の思想がいかに朱子學に吸收されたかに關して、張載の氣論は、物および太虚との循環過程における氣の聚散であつたが、朱熹は、太虚を切り捨て、一氣の聚散による萬物の生滅という形でこれを吸收した。また、張載の心性説は、虚への回歸という觀念を背景とするが、朱熹は、そこを切り捨て、天地氣質の性説を吸收した。要するに、朱子學に吸收されたのは、張載が提示したところの思考方法の構造であり、その思考を裏打ちする部分、いわば思想の眞面目となる虚への志向は、排除されたことを明らかにした點である。

第三に、張載の學がどのように評價され、後代にどのような影響を及ぼしたかに關して、張載の思想の核心となる虚の思想は、程朱學から排除されたものの、その排除された部分に影響を受けた思想家が南宋以降、清代に至るまで連綿と出現すること、さらに良知という概念を説明する王守仁の論理に、張載の虚氣相卽の渾一思想との類似が認められることを指摘するとともに、呂大臨が張載の學を繼承しつつ、程頤の影響を受けて關學を進展させたことをとりあげ、張載の學、そして關學の影響は、思想史の背景にあつて、目立たないものの、長く命脈を保ったことを指摘した點であ

る。

また、本論文の各論は、一編を除き、北海道大學中國哲學會（舊北海道中國哲學會）刊行の『中國哲學』において、９回に分けて掲載された諸論考に基づくものであり、殘る一編は、松川健二編『論語の思想史』（汲古書院、1994 年）に收錄された後、臺灣にて中國語に飜譯され、『論語思想史』（萬巻楼、2006 年）に収載されるとともに、公表されている。これらのことから、いずれの論考も、國内外の學會において一定の評價を得ていること、いうまでもない。

最後に、審査を通じて、張載と同時代の王安石との關係について、その政治的な側面ばかりでなく、思想的な影響についても視野に入れるべきこと、後代における張載の影響について考察する際、王船山『張子正蒙注』への論及は不可缺であることなどの指摘があった。しかし、申請者自身、この點を十分に自覺しており、今後、研究を進める中で、發展的に解消されることが期待できる。

・学位授与に関する委員会の所見

以上の審査結果に基づき、本審査委員會は、全員一致して本論文が博士（文学）の學位を授與するに相應しいものであるとの結論に達した。